

3 第二代駐日フランス全権公使・レオン・ロッシュ

1864年、第二代駐日フランス全権公使となったのは、レオン・ロッシュ（1809-1900）でした。日本が開国してまもない頃で、上質な生糸を求めてフランスの商人が横浜に集まり始めていました。グルノーブル出身のロッシュは、グルノーブル大学に入学しましたが、半年で中退しました。アルジェリアで農園を経営していた父親に呼ばれてアルジェリアへ渡り、アラビア語を身に着けました。そして、フランス軍アフリカ部隊の通訳官となり、アルジェリア側の指導者アブド・アルカーディルとの交渉を担ったことが、外交の道へ進むきっかけとなりました。軍を離れた後にモロッコのタンジェ領事館員として赴任し、トリポリ（リビア）やチュニス（チュニジア）の総領事を歴任した後に、日本に着任しました。



Michel Jules Marie Léon ROCHES
(フランス国立図書館)

アラビア語の専門家であったロッシュが日本に派遣されたのは、イギリスに先を越されていた通商政策を推進するためであったと考えられています。密かに反幕府勢力に協力していたイギリスに対抗するために、フランスは江戸幕府に接近しました。ロッシュは、幕府からの依頼で、横須賀造船所を建設するためにフランスから技術者を招き、フランス語を解するエリート士官を養成するための横浜仏語伝習所の開設に尽力しました。フランスから軍事顧問団の派遣も実現させました。

1867年、徳川慶喜が大政奉還をして、ロッシュが支援した江戸幕府の時代は終わりました。しかし、ロッシュによって日本にもたらされた技術や知識は、明治時代の日本の近代化に大きく貢献することになりました。

掲載日：2021年3月12日